彼女は半分幽霊で

ディライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女は半分幽霊で

【Ｎコード】
Ｎ９４７３Ｚ

【作者名】
ディライト

【あらすじ】
ある日忘れ物を取りに深夜の学校へ忍び込むと、教室にいたのは見知らぬ美少女。彼女は天冠を取ると人間に戻ることのできる幽霊だった。って、それって幽霊って言うの？ちょ、つ、憑いて来るなって！
杉太と幽子のちょっと不思議なラブコメディー。

第1話：出遭いは突然に（前書き）

ディライトと申します。
初めにこの小説は不定期連載です。もう一つ連載作品を持っていまして、そちらで書き詰まったりなんかした時に気分転換で書こうと思っています。
まぁ沢山反響があればこっちの比重も多めにしようかと考えてますが、そんな筈はないので。
ではのほほんとスタートです。

第1話：出遭いは突然に

早速であるが、一つ質問させてもらってもいいだろうか？
質問をするのに承諾を得る、なんて野暮ったいことをしてしまったが、俺の聞きたい事はずばりこれだ。

『幽霊に会ったことがありますか？』

何言ってんだこのタコスケは。
どこぞの馬の骨ともわからぬアホが何か抜かしてるぞ。
・・・なんて思われてる方が多数であると思う。
俺もいきなり親友にこんな質問をぶつけられたら長年の固い絆もバラバラになるし、恋人に言われたなら百年の恋も一気に氷点下さ。
よし、わかった。
じゃあ、質問を変えよう。

『幽霊に会いたいと思いますか？』

勝手に会ってろボケナス。
会うの字が違う、正しくは遭うだろマヌケ。
・・・なんて思われてる方が多数であると思う。
俺も会いたい・・・いや遭いたいなんて思わないね。祟られて人生急転直下なんて話はよく小耳に挟むもんだ。怖い目にあってトラウマになるってのもよくある話だな。
そう幽霊にいいイメージなんて無い。
大体がそうさ。
好んで幽霊に遭いに行くやつなんてよっぽどのオカルトマニアか、はたまた怖がる彼女に抱きつかれたいがために意気揚々とお化け屋敷に乗り込む彼氏ぐらいなものだろう。

っていうか遊園地なんて楽しげなとこにお化け屋敷とか本来浮きすぎだろ。
幽霊なめんな、なんて本物の幽霊様から苦情が来たりしないもんかね？

おっと話が逸れたが、要するに俺が言いたいのはな？
幽霊になんて怖いし祟られるし憑かれるし呪われるし他にも何されるかわかったもんじゃない。
だからそんなヤツに遭いたいなんて気持ちはミジンコほどもありゃしないってことだ。
皆もそう思うだろ。そんな物騒なことにわざわざ関わりたがるやつなんてそういないのさ。
ただ、俺が何故こんな話を始めたか。
勘がいい方ならもうお気づきかと思われるが、

・・・・・・・・・・・・遭っちまったんだな～これがさ。
しかも、その幽霊がさ――――――――

◇◇◇

「うっそだろ！？」
衝撃の事実だ。
今日出された物理？の課題であるプリントが、俺の鞄から忽然と姿を消していた。
「ちょ、マジかよ！？　なんで・・・ハ！」
思い出した。そう言えば帰り際、どうにも体操着が鞄に入らなくて一度整理するために中身を全部出した。まさかあの時除外して机の中に入れたノート群の中に・・・・・・・・。

はぁ・・・・・・。

俺は、来須杉太(くるすさんた)。まぁごくごく普通の高校生二年生だ。

・・・今苗字と名前逆にしたら、とか思ったろ？ちょっと英語でき

ます的に発音するとこうなるよね～的に思ったろ？

英語の授業なんて、

「Ｍｒ．Ｓａｎｔａ　Ｋｕｒｕｓｕ！」

なんて言われるんだぞ。

悪かったなサンタクロースでさ。でも何もやらんぞ。

何故だか無性に自己紹介がしたくなった俺はふと時計に目をやると、

現在午前１時。

「今から・・・か・・・」

どうにもやる気が起きなくて、部屋で呑気に菓子を食いながらテレ

ビを見ていたらもうこんな時間だ。

さぁて、追い込まれた事だしいっちょ課題を片付けますか！

そう思った矢先にこれだよ。

しかし明日の物理？の先生は鬼教師で有名で、宿題を忘れようもん

ならフレミングの法則両手で５時間耐久の刑に処されかねん。意外

とあの指の形疲れるんだぞ。

「仕方ない・・・行くか」

俺はひとりごちて、上下スウェットのままさっさと家を飛び出した。

俺の通う県立山之上高校へは徒歩で５分。

歩いて通えるし、山の上に聳(そび)え立っているわけでもないので通学に

は困らない。

「・・・っと」

ポツリと俺の頬に落ちる水滴。

「マジかよ、傘持ってきてねえ」

雷様も寝相が悪いのか、先ほどまで綺麗だった夜空を光らせ始めた。

そろそろ夏も始まろうとしている7月のはじめ。走ると夜中でも汗が滲んでくる。
今更戻るのも面倒だし、まぁでも少しの辛抱だ。俺は諦めて眠い身体に鞭を打って走り出した。
中距離走を走破して、俺は学校の正門に辿り着く。しかし勿論門は厳重に鍵を掛けられている。高さは俺の身長１７０の更に上の上。１９０ぐらいだろうか。
「ふっ、これくらいでいいのか？」
俺はニヤリと口角をあげると、ジャンプ一閃。
鉄柵に素早く足を掛け、そこからさらに二段ジャンプ。
高飛びのベビーロールの要領で頂点を越えると、反対側へと着地。
「今回も決まったぜ」
格好つけてはいるが、常習犯である。遅刻したときも正門は閉められてしまうので、この方法は山之上高のやつらなら誰でも習得している技術だ。
そして忘れ物組の進入経路も既に学内では暗黙の了解、調査済みだ。
「保健室の左から三番目の窓の鍵は壊れてる・・・っと」
窓を少し押し気味に動かしてあげると、カチャリという音とともに窓が開く。一見壊れてないように見せかけているところが肝だ。
手際よく校内へと侵入すると、保健室の暗闇が俺を迎え入れる。
「そういやぁ、こんな時間に学校くんの初めてだな・・・」
流石に深夜に忘れ物を取りに来たことはないため、かなりの暗闇と静寂に足が竦む。備え付けの時計の音と外の雨の音だけがやけに響いて薄気味悪さを増長させる。
「・・・・・・・・早く取って帰ろう」
俺は目的を遂行するため、そそくさと保健室を飛び出た。ひたひたと歩く音だけが廊下に響く。その音は妙に反響して俺の耳へと戻ってくる。賑やかな昼の様子を知ってしまっているからか、まるで裏の世界に足を踏み入れてしまったかのようだ。
その時だった。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」
眩しい光と共に割れるような落雷音。
ヤベーー！！　チョーコエー！！　マジで腰抜かす5秒前！　何！？　夜のガッコーやばすぎるだろ！
つうか近くに落ちたんじゃねえか？
徐々に強くなる雨の音が、学校内を悪魔城のように見せる。あまりに未体験な状況を早く脱したくて、俺はとにかく足早に3階の2年生教室へと急いだ。
もう走ってると言うよりも千鳥足というのが正しい足取りで、俺はようやく所属する2－B教室へと辿り着いた。
なんというかRPGのラスボス前の緊張感だぜ・・・。
中で待ち構えているのは教室で飼っているカメだけの筈なのに、教室の扉に手を掛ける俺の左手は緊張に震えている。それもこれも全部雷雨のせいだ。いらないんだよこんな無駄な演出はよー！
そんなことを考えながら、俺は意を決して教室の扉を開けた。
「イテ」
コツンと音をたてて俺の頭でバウンドし、目の前に白い粉とともに長方形の物体が落ちてきた。
「こ、黒板消し・・・？」
な、なんて子供だましな罠を・・・。小学生かよ。引っかかる俺も俺だけどな。

「あは！　ひっかかったひっかかった！」

それと同時に教室内に響く声。
そいつは無邪気に笑い、教室入って直ぐ左にある先頭の席、簡単に言えば俺の席で頬杖を付きながら座っていた。
すげー美少女だ。山之上高の制服に身を包んだ彼女は、腰まで流れる枝毛一つも見当たらないような黒髪に、シミも出ることを遠慮す

るくらいの綺麗で白い肌。二重で主張するくりっと大きな眼に、自然な流れで形作る鼻。ぷるっと弾ける唇は色気も感じさせる。
もうね、ど真ん中直球ストライク！　見逃し三振バッターアウトですよこれ。
そんな娘がね、小悪魔的表情で俺の間抜けな姿を見て喜んでるところを想像してみてくれよ。
夜中の暗闇教室も発電所に早代わりってもんだ。
眩しすぎて見てられん。
・・・見てられんのだが、それでも描写せねばならんだろう。
ただそいつは妙なアクセサリーを付けていた。

「・・・なぁ、その頭に付いてるのなんて言うんだっけ？」
思わず聞いてしまったよ。だってこの娘が付けてるのって、よくお化け屋敷とかでバイトの幽霊さんとかが付けてる三角のふんどしを逆にしたようなそれと同じなんだもんよ。
「ああ、これ？　天冠（てんがん）って言うらしいよ～。――ってあんた！見えるの！？」
「な、何が？」
「私のこと」
見たことはないな。少なくともうちのクラスの娘じゃないだろう。
「そうじゃなくて！　私自体のこと！！」
そう言って彼女は慌てて席から立ち上がった。そして彼女は驚くべき言葉と驚くべき身体で、俺を腰砕けにした。

「だって私、ユーレイだよ！？」

彼女は手を広げてホラと主張する。
全体が見えて、彼女の身体がどうなっているのかはすぐにわかった。足がない。制服のスカートから伸びるそれは足と言えるものではなく、よく絵で描かれるような幽霊の持つ下半身に酷似していた。そ

の下半身は動くごとにゆらゆらと燃える炎ように動いていて、俺の眼がおしゃかになったのでなければ、どう見てもこの娘は幽霊と言っても差し支えないように思える。
「だ、大丈夫・・・？」
彼女が腰を抜かした俺に手を差し伸べてくる。その手を俺は恐る恐る握ってみる。彼女は握り返してきた。
温かい。人間の体温だ。
俺は彼女の力を借りて起き上がるとまずは一つ深呼吸をして、自分を落ち着かせる。
そして状況を整理しつつ、今現在俺の頭に挙がっている数ある質問候補に探りを入れる。
さて何から聞こうか・・・。
彼女は可愛いらしく首を傾げながらキョトンと俺を見つめている。
「・・・えと、あなたは一体？」
おい、そこ！　俺のクエスチョンチョイスにがっかりするな！
しょうがないだろ、一応相手は幽霊なんだぞ！　まずは様子見が大事だ！　呪われたらどうすんだ！
「私？　ユーレイだよ！」
語尾に音符でもつきそうに答える。
「それはわかった。いやわかってないけど・・・ん～じゃあ名前！　名前は？」
「え～と・・・あ、ゆうこ！　確か！」
確かってなんすか。
「・・・だって覚えてないんだもん」
「覚えてないって・・・じゃあなんで化けて出てきたんだ？」
「し、失礼な！　化けてなんてないよ！　私は私！　もうずっと前からここにいるんだから！」
「ずっとっていつさ？」
どこか怪しい彼女は下唇に人差し指を当てて考える。
「ん～・・・わかんない」

埒が明かない。
「だって、本当にわかんないんだもん・・・。気付いたら私はこうしてこの教室にいて、私はいつもトラップを仕掛けてた」
それで毎回忘れ物組のトラップに引っかかる様を見て笑ってたんですね。
「ち、違うよ！　あんたホント失礼なやつだな！」
さっき俺がかかってケラケラ笑って、「ひっかかった～！」とか言ってた癖に・・・。
「――っとそうだちょいとごめんよ」
ふと思い出して、俺は当初の目的を遂行する。
がさごそと自分の机の中を物色して目当ての物はやはりその中に封印されていた。
「・・・？　何してるの？」
「当然忘れ物の回収さ。お前もトラップ仕掛け続けてたなら、こんな時間に人が来る理由くらい知ってるだろ？」
俺がプリントの入ったノートを彼女に見せ付けると、ノートに書いてある俺の名前を復唱した。
「くるす・・・すぎた・・・。どっちがお名前？」
「すぎたじゃねえ、さんただ」
「さんた・・・？　くるす・・・。っぷ」
もういいよじゃんじゃん笑ってくれ。諦めてるから。
「フフ・・・じゃあさ、」
彼女は笑いを沈めるように深く深呼吸すると、気を引き締めるように真剣で、そして憂いを帯びた表情でこう言った。
「私のプレゼントは『私がここにいる理由』と『あなたが私を見える理由』でいいよ。サンタさん」
そしてふわりと包み込むような笑顔を俺に向けてくれた。
けどな、
「今は7月だ。サンタクロースは現在絶賛爆睡中だ。それにサンタは二つもプレゼントをくれるほど太っ腹じゃねえ」

腹は出てるがな。
「あ、後『私が幽霊である理由』っていうのもいいな～」
聞いちゃいねー。
「うん、まぁいいや。俺課題やんなきゃならんし、もう行くわ」
そう言い残して俺が教室を去ろうとすると、彼女はかなり慌てた様子で俺の肩を掴んでくる。
「え！？　チョット待ってよ！　私も連れてってよ！」
「おま、ここに憑いてる幽霊なら移動しちゃダメなんじゃねえのか！？」
「そんな幽霊界の常識なんて知らないよ！」
「お前幽霊じゃねえか！」
「プレゼントくれるって約束したじゃん！！」
「約束はしてねえ！　おい、ちょ、押すなって・・・」
端整な顔がどんどんと俺に迫ってくる。なんかいい匂いするし、なんで幽霊がこんなに色っぽいのよ！
ぐちゃぐちゃと揉み合っていると、再び大きな劈（つんざ）くような雷音。
「きゃあああああああああああああ！」
「おい！　あぶ・・・っ！」

激しい音と共に足を滑らせた（？）ように後ろに倒れる彼女を庇うため、とにかく頭を打たないようにと腕を後頭部に回してやる。それは一瞬であったが、どうにか一大事は免れたようだ。（幽霊なので痛みがあるのかは知らんが。）
と安心するのも束の間、彼女の上に覆いかぶさるようになってしまった。息が掛かるほど顔も近づけて、大変気まずい体勢である。
「わあああああ！　す、すまん！」
慌てて俺は後ろに弾かれる様に彼女から離れた。
「あ、あ、あわ・・・・・・・・」
彼女も硬直してその場で倒れていたが、ふと顔上げると彼女の元より大きな瞳はこれでもかというほど見開いた。その彼女の目線は、

自分の足元と俺、いや俺の腕辺りを行ったり来たりしている。
彼女に釣られるように俺も目線を下へと移す。
「・・・・・・・・・・・・・・・ふえ？」
思わず素っ頓狂な声を出してしまった。ただこの様子を見てしまったらこんな声も出さずにはいられない。いや声が出ただけ俺を褒めたい。
何故なら、先ほどまで幽霊の象徴であった彼女の下半身は、人間のそれと同じ、女の子の綺麗な二つの足へと変化を遂げていた。
しかも彼女のもう一つの視線、俺の腕辺りに引っかかっていたのは・・・、

彼女の天冠だった。
「「えええええええええええええええええええええええええええ！！！？？？」」

第2話：憑かれた日

「な、ななななんで！？」
彼女は自分の足と俺の腕に引っ掛かっている天冠（てんがん）を交互に見ながら、宇宙人にでも遭遇したかのように眼を見開いている。
「なんでって、こっちのセリフだ！」
「サンタさんは魔法使いだったの！？」
「魔法使いなわけないし、俺はサンタクロースじゃない！」
「じゃあこの足プレゼント！？」
「一回落ち着こうか！」
俺は一先ずあわてふためく彼女を制して、次に自分の腕に引っ掛かっていた天冠を取る。
まさか、これが頭から取れたから・・・？
「あ！　後ろにＵＦＯ！」
「え、どこどこ！？」
俺は彼女の後ろの窓を指差して、いるはずのない物体の名を叫ぶ。
本当はここにも居てはいけない物体がいるのだが。
彼女は俺の今時幼稚園児でも使わない古典的な手にまんまと引っ掛かって、座ったままの状態で身体を捩って窓の方に振り向く。
今だ！
俺は素早く天冠を頭に回して蝶結びで縛った。
その瞬間、彼女の生足は熔けたように青白くなり、それは次第にゆらゆらとした炎のように戻ってしまった。
「・・・なんだ何もいないじゃん――――ってええええええええ戻ってる！？」
「わるい、戻しちまった」
俺は後頭部を撫でて舌を出す。
「ちょ、どういうことなの！？　サンタさんは裏切り者だったの！？」

「サンタじゃねえって言ってるだろ！？　いや名前はサンタだけども！」
「ああもう！　そんならお前の足よこせ～・・・・・・！！」
「急に怨霊っぽくなったな！？　ってか幽霊ってより妖怪だよそれ！」
彼女は長い髪の毛を床に引きずりながら、俺の足に縋ってくる。
「まてって！　天冠をもう一度取ってみろって！」
このままでは本当に足を刈られかねないと思い、俺は直ぐさま原因と思われる事を叫んだ。彼女はぴたりと停止して顔をあげると、きょとんとした表情を向けて固まる。
「へ・・・？　天冠とるの・・・？」
「そうだよ！　さっきはそれでお前の足があったんだ！　今戻ってるのは、さっき隙をついてつけ直したからだ！」
俺の言葉を聞くなり、彼女はすぐに天冠を取った。すると青白い炎は次第に女性の足へと変化を遂げて、人間として全く違和感がなくなった。
「い、い、い・・・・・・」
自分の足を驚きの表情で凝視している。
そして、
「生き返った～～～！！！！」
と叫びながら俺に抱きついてきた。女性一人分の重さを一身に受けて、俺は覆いかぶされる形でのけ反った。
「ちょ、お、おい離れろって！」
「ありがとーサンタさん！　最高のプレゼントだよ～！」
「わかったから！」
聞こえていなのか彼女は離れる事なく抱きついたまま、俺の胸におでこを当てて擦り寄っている。彼女の体温を感じる。先程手を握った時も感じた、人間としての温もり。顎下にある彼女の髪の毛からか、甘い匂いが鼻を擽る。小さい制服に包まれる華奢な身体も、痩せすぎているとは言い難い。彼女はまるで幽霊ではないような幽霊

だった。
「・・・なぁお前って幽霊と人間のハーフなのか？」
「あー今はハーフって言っちゃいけないんだよ！　ダブルって言わなきゃいけないの！」
「あ、そういやそうだな。ってそうじゃなくて！」
なんで幽霊さんが近年の人種差別問題に詳しいんですか。
「・・・ん、わからないよ」
「わからないって・・・」
急にテンションを落として、俺の背中に回している手に力が入る。
「・・・さっきも言ったじゃん、気づいたらここにいたって」
これ以上聞くのは野暮だと思って俺は追及の言葉を飲み込んだ。
「それよりさぁ・・・」
「ん・・・？」
「いつまで抱き着いてるんすかね・・・？」
俺がそう言うと、彼女は弾けるように後ろへ離れた。
「そそそ、そういうことは早く言ってよ！」
自分の身体を自分で抱きしめて、顔を真っ赤に紅潮させながら抗議の声をあげる。
「お前が抱き着いてきたんだろうが！？」
「あー！　そういってラッキースケベを狙ってたんだっ！　このスケベサンタ！」
ああなるほど、痴漢の冤罪で捕まった時の気持ちってこんな感じなのか。
「あ～あ～わかったわかった。悪かったよ。人間に戻れて良かったな。んじゃ俺帰るので」
これ以上関わるとろくな事にならなそうだったので、早急に退散することを決め込んだ。
俺は素早く立ち上がって踵を返すと、右手だけ挙げて去ろうとした。
「ちょ、待ってって！　連れてってよ！」
無視だ無視。

何を好んで自分から幽霊を連れて帰らねばならんのだ。
そう思って、俺はダッシュで教室を後にした。
「待てぇぇぇぇ！！」
「げ！？」
するとすぐに後ろから彼女は追い掛けてきた。手に入れたニューフットで。随分使いこなしてるなおい！？
「待てと言われて待つやつがいるかっ！」
俺は更にスピードを上げて、階段を2段飛ばしで駆け降りる。ちらりと後ろを見ると、流石にまだ使い馴れていないのか元から足が遅いのか、俺のスピードについて来れていなかった。
よし、このまま逃げ切れる！
それにしてもなんで深夜の学校で幽霊と恐怖の鬼ごっこしてるんだろうな！
「逃がさないぞー！」
「うお！？」
変わらぬスピードで階段を駆け降りていると、一度は撒いたと思っていた彼女は、俺より早い速度で階段を駆け降りてくる。その彼女はもう足を使っていなかった。
「おい、ずるいぞ空飛ぶなんて！」
「これが私の足だよ！」
何の名言だよ！？　そんなこと言っても陸上種目には出れないからな！
もうそろそろ侵入を企てた保健室へと差し掛かる。
が、
「捕らえた！」
彼女はその掛け声とともに黒板消しを投げ付けてきた。
後頭部の方に一瞬の痛みを覚えて、俺の視界はフェードアウトした。
ああ、やべ・・・・・・呪われる・・・・――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9473z/

彼女は半分幽霊で

2012年1月12日18時52分発行